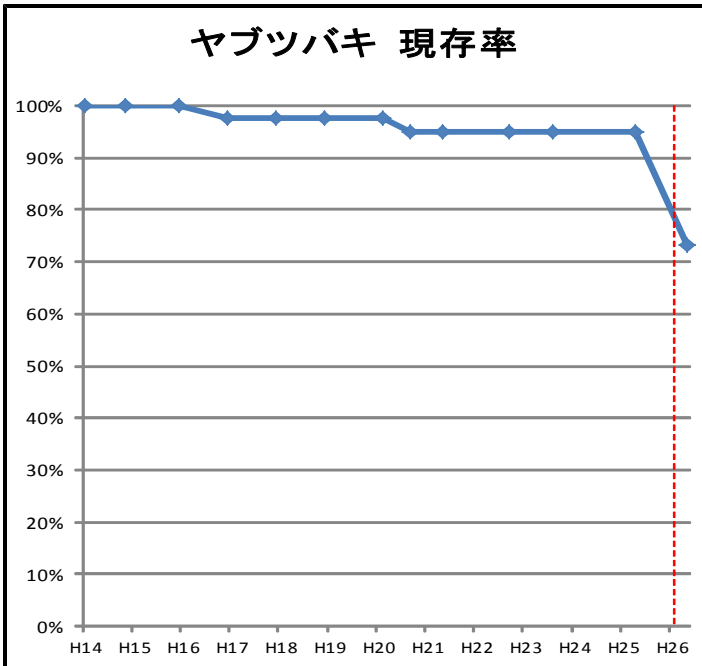
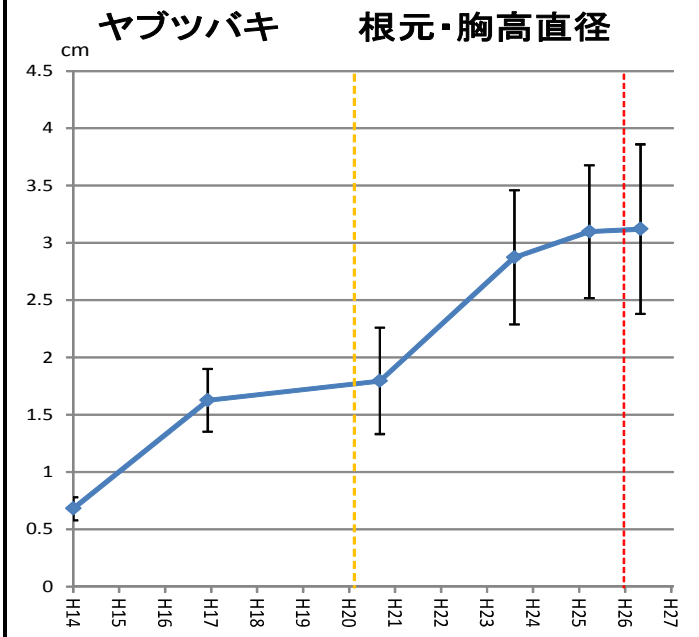
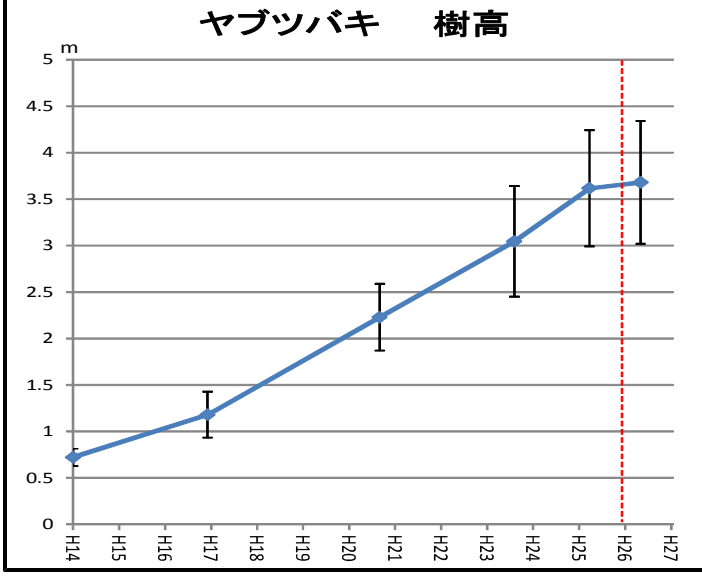
樹種名	ヤブツバキ
科　目	ツバキ科
学　名	*Camellia japonica*
分　布	本州、四国、九州、南西諸島から、国外では朝鮮半島南部と台湾に分布。 本州中部にはごく近縁のユキツバキがあるが、ツバキは海岸沿いに青森県まで分布し、ユキツバキはより内陸標高の高い位置にあって住み分ける。
樹木特性	陰樹であり、山地の照葉樹林に生息する。比較的日当たりの良い場所を好み、尾根沿いに発達した林や二次林などの低い林に多い。暗い環境では成長することから耐陰性は高い。生育環境が良好な場合では、寿命は最大樹齢が 100 年以上と推定され、埋土種子は無い。
用　途	公園樹、器具・彫刻材、盆栽としても利用。（印材や将棋の駒）
植栽本数	150 本 （他樹種との混植）
特　徴	【樹　形】 ツバキの野生種をヤブツバキといい、常緑小高木。普通は高さ 5~6m だが、樹高 18m・胸高直径 50cm にも達する例もある。ただし、その成長は遅く、寿命は長い。 樹皮はなめらかで灰白色、時に細かな突起がまばらに出る。 枝はよくわかれ、冬芽は線状楕円形で先端はとがり、円頭の鱗片が折り重なる。 鱗片の外側には細かい伏せた毛がある。鱗片は枝が伸びると脱落する。 葉は互生、長楕円形から広楕円形、鋭尖頭（先端が突き出す）で葉脚は広いくさび形、縁には鋸歯が並ぶ。葉質は厚くて表面につやがあり、濃緑色で裏面はやや色が薄い。 木質は固く緻密、かつ均質で木目は余り目立たない、摩耗に強くて摩り減らない等の特徴から工芸品、細工もの等に使われる。
試験地での様子	ポット苗を植栽し、病虫獣害も特に見られず現存率も 73%と高い。成長量は大きくはないが順調に生育している。
被　害	鹿による幹の剥皮害を受けやすいとされているが、当試験地では被害は見られない。



【現存率】
枯死は少ない。
平成 26 年度に、毎木調査を実施した結果の現存率は 73.3%であった。
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



【根元・胸高直径】
順調に成長している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 3.11 ㎝であった。
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。
※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。



【樹 高】
順調に成長している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 3.68m であった。
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

《プチ情報》
ツバキの花は古来から日本人に愛され、京都の龍安寺には室町時代のツバキが残っている。他家受粉で結実するために変種が生じやすいことから、古くから品種改良が行われてきた。江戸時代には将軍家や肥後、加賀藩などの大名、京都の公家の他、庶民の間でも大いに流行し、たくさんの品種が作られた。日本酒の醸造には木灰が必要で、ツバキの木灰が最高とされている。また、アルミニウムを多く含むことから古くは染色用にも用いられた。
ツバキの花は花弁が個々に散るのではなく、多くは花弁が基部でつながっていて萼を残して丸ごと落ちる。それが首が落ちる様子を連想させるために入院している人間などのお見舞いに持っていくことはタブーとされている。この様は古来より落椿とも表現され、俳句においては春の季語である。